復興庁
Reconstruction Agency

「私の心のなかの福島」をテーマとして外国人が書き上げた日本語作文コンクールの受賞者を土屋品子復興大臣が表彰

実施日時：2023 年 12 月 4 日（月） 会場：復興庁 記者会見室

最優秀作品賞はグナシンハ ラクミニ エランガーさん（スリランカ）「夢をくれた福島 ありがとう！」

福島の文化に触れ、被災地復興の現状を視察するツアーに 9 名の受賞者が参加

復興庁は、「私の心のなかの福島」をテーマとした外国人日本語作文コンクールを実施し、最優秀作品賞を含む上位作品 10 点の表彰式を 2023 年 12 月 4 日（月）、復興庁記者会見室で開催しました。

土屋品子復興大臣と受賞者の記念撮影（写真左）と、最優秀作品賞を受賞したエランガーさんの表彰風景（写真右）

本コンクールは、世界各国で日本語を学んでいる方々に、日本語で作文を書くことをきっかけとして、原子力災害からの復興の現状や福島の安全性と魅力などについて理解を深めていただき、風評の払拭を図るために開催したものです。

7 月 10 日（月）から 10 月 10 日（火）までの募集期間には国内外 31 の国や地域から 878 点の作品が寄せられるなど本コンクールに対する反響は大きく、福島県出身の日本語教師との出会いから福島に対する憧れを抱き、その想いを熱く綴ったスリランカの学生・グナシンハ　ラクミニ　エランガーさんの「夢をくれた福島　ありがとう！」が最優秀作品賞／復興大臣賞を受賞しました。エランガーさんを含む 9 名の受賞者（都合により 1 名は欠席）は 12 月 2 日（土）から 3 日（日）にかけて実施した、福島県東部の浜通りエリアを訪問する視察ツアーにも参加。震災遺構や復興した施設を訪れたほか、福島の人々と交流しながら地元の食文化や魅力に触れ 2 日間を過ごしました。（現地での様子は本リリース 3～5 ページに掲載しています）

翌4日（月）、復興庁で開催した表彰式では、最優秀作品賞／復興大臣賞を受賞したエランガーさんが受賞者を代表してあいさつし、「スリランカで日本語の先生と出会い、話を聞いているうちに福島を自分の目で見たいと思うようになりました。日本へ来る前に『福島わらじまつり』や『ふくしま駅伝』の様子を映像で見て、すごく勇気とパワーをいただきました。実際に行った福島は本当に素晴らしいところでした。東日本大震災から復興していく福島の姿を見て感動しました」と福島への憧れと出会いについて語り、さらに福島の人々に向けて「私たちは帰国して離れ離れになりますが心はひとつです。どんなに遠くにいても福島のことを温かく見守っています。私に夢をくれた天国の地・福島をいつまでも応援しています」とエールを贈りました。

土屋品子復興大臣は、「福島の復興を応援してくださる皆さんの熱い思いや優しい気持ちが伝わってくる作品ばかりでした。この体験をご家族やご友人など多くの方々に伝えていただき、福島のさらなる復興の後押しをしていただけるようお願いいたします」と受賞者に語りかけ、「福島の復興を応援してくれる人たちが世界中にますます増えていくことを期待したい」と述べました。

復興庁
Reconstruction Agency

■表彰式の様子

表彰式に登壇した土屋品子復興大臣（写真左）。最終審査員を務めた佐藤亜紀氏、高村昇氏、マクマイケル ウィリアム氏（写真中）。最優秀作品賞／復興大臣賞を受賞したグナシンハ ラクミニ エランガーさんのスピーチ風景（写真右）

表彰式概要

・日程　2023 年 12 月 4 日（月） 14:00～14:20
・会場　復興庁 記者会見室（東京都千代田区霞が関 3-1-1 中央合同庁舎第 4 号館 6 階）
・登壇者　復興大臣 福島原発事故再生総括担当／土屋品子（つちやしなこ）
福島県 副知事／鈴木正晃（すずきまさあき）
特定非営利活動法人日本語スピーチ協会 理事長／笈川幸司（おいかわこうじ）
HITOkumalab 代表／佐藤亜紀（さとうあき）
東日本大震災・原子力災害伝承館 館長／高村 昇（たかむらのぼる）
国立福島大学 国際交流センター 副センター長 准教授／マクマイケル ウィリアム

受賞者および作品タイトル

最優秀作品賞／復興大臣賞	グナシンハ ラクミニ エランガー（スリランカ・23 歳・学生） 「夢をくれた福島 ありがとう！」
福島県知事賞	オバシ ジョセフ エフィオム（ナイジェリア・24 歳・学生） 「心の中のフクシマ」
優秀作品賞	ウンベルト テノリオ（メキシコ・26 歳・学生） 「メキシコと福島の繋がり」
	ナザルコ アドリアナ（アメリカ合衆国・25 歳・社会人） 「七転び八起き」
	ブレシュテヌスカー クラウディア（スロバキア・23 歳・学生） 「我々の努力から生まれられる結晶とは」
入賞作品	ハンス ラソ（メキシコ・24 歳・学生） 「福島 希望の場所」
	リー チェンロン（台湾・22 歳・学生） 「私が信じる、福島の未来の姿」
	シュウ（中国・47 歳・社会人） 「私の心の中の福島」
	カク ゲイカ（台湾・20 歳・学生） 「祝福された島―福島は私にとって…」
	ホウ トクユウ（中国・41 歳・社会人） ※表彰式および福島視察ツアーは欠席 「福の島、心寄せれば、福来るさ。」

【ご参考】「福島」をテーマとする外国人日本語作文コンクール 募集要領

・応募資格　日常生活での使用言語が日本語以外の方で、海外または日本国内で日本語を学んでいる方（高校生、専門学生、大学生、社会人など）
・募集期間　2023 年 7 月 10 日（月）～10 月 10 日（火）
・募集テーマ　「私の心のなかの福島」
作文のタイトルは自由。文章の一部に「福島」について言及する部分があれば、内容は自由。
・使用言語　日本語（本文字数は 800 字以上、1600 字以内とする）

■受賞者を招待した視察ツアーについて

『私の心のなかの福島』が“映像と想像だけの世界”から“現実”になった、2 日間の旅

2023 年 12 月 2 日（土）から 3 日（日）、「私の心のなかの福島」をテーマとした外国人日本語作文コンクールの受賞者 9 名（1 名は都合により不参加）を招待し、福島の人々と楽しく交流しながら地元の食や文化に触れ、魅力を感じていただくと共に、2011 年の東日本大震災で受けた大きな被害から復興していく福島の現状を知っていただくための視察ツアーを実施しました。

本ツアーで訪問した地域は福島県東部の太平洋に面した「浜通り」エリアで、東日本大震災においては地震や津波による甚大な被害だけでなく、東京電力福島第一原子力発電所の事故により、住み慣れた家から避難しなければならない人々が多かった土地でもあります。東京を出発し福島・いわき市に到着した受賞者 9 名は、地元でとれた海産物や野菜を使ったランチを楽しんだ後、「環境水族館　アクアマリンふくしま」や観光物産館「いわき・ら・ら・ミュウ」を見学し、夜は寿司にぎり体験に参加。ある受賞者は、「福島の海産物については、先入観による情報が多かったので不安な気持ちもありましたが、地元の人々が一生懸命、そして楽しそうに振る舞ってくれる姿を見て安心できることを感じました」と笑顔を見せ、人生で初めて握った寿司に舌鼓を打っていました。

2 日目は楢葉町にある「ナショナルトレーニングセンター J ヴィレッジ」を見学したほか、双葉町の「東日本大震災・原子力災害伝承館」、浪江町にある震災遺構「浪江町立請戸小学校」を訪れ、震災当時や今日までの復興の経過について語るガイドの話に耳を傾けました。また、夜は福島県産カレイなどの海産物を炭火で焼いて味わう松川浦伝統の「浜焼き」も体験。「『私の心のなかの福島』は、これまで映像と想像だけの世界だったけど、現実のものになりました。福島の人の温かい気持ちや、復興に向けて一生懸命努力を続けていることに心を打たれたので、この旅で知ったことを自分の国に帰ってから伝えたい」と想いを語る声も聞かれました。

【1 日目】12 月 2 日（土）

福島に到着して最初の食事は、焼き魚や刺身など、地元の新鮮な海産物を素材に用いた定食でした。福島第一原子力発電所の廃炉作業に伴い、放射性物質であるトリチウムを含んだ ALPS 処理水が海洋放出されたことにより、多くの国でさまざまな憶測が流れ「福島について学ぶ前は不安があった」という声も聞かれましたが、食品に含まれる放射性物質の量が適正に計測されていることを知った受賞者たちは、観光物産館「いわき・ら・ら・ミュウ」で海産物が販売されている様子を見つめ、自身の目で安全性を確かめるように見学していました。

「環境水族館　アクアマリンふくしま」では、約 150 人の来場客とスタッフが懸命に避難した震災当日の様子が生々しく語られ、受賞者たちは静かに耳を傾けていました。水温や水質など「水の維持」が何よりも大切な水族館において、電力が供給されなくなることは展示している生物の生命にかかわること、そして本来平等であるべき生命を選択しながら生物を助けなければならなかった悲しさが語られました。「福島の人々に勇気を与えよう」と苦難を乗り越えながら短期間で営業を再開した話題では、思わず手を叩く姿も見られました。

初日は楢葉町にある「ナショナルトレーニングセンター　J　ヴィレッジ」に宿泊し、楽しみながら日本食文化に触れるプログラムとして「寿司にぎり体験」にも挑戦。ほぼ全員が寿司をにぎった経験がなく「寿司を食べることが初めて」という声も聞かれる中、法被（はっぴ）スタイルの調理白衣を着た受賞者は真剣な面持ちでシャリとネタに向かいました。和食を担当する料理長の指導を受けながら格闘を続け、見事に完成した 3 貫のにぎり寿司を じっくり堪能。紙製の帽子は記念品としてプレゼントされ、「帰国して料理する時に被る」と喜ぶ姿も見られました。

【2 日目】12 月 3 日（日）

宿泊施設として訪れた「ナショナルトレーニングセンター　J　ヴィレッジ」も東日本大震災で大きな被害を受け、7 年以上の休業期間を経て復興した施設であることから、その歴史を学ぶ時間が設けられました。直接的な津波の影響こそなかったものの、ピッチに大きな亀裂が生じ使用できなくなったことや同施設のアリーナが被災者の避難所として使用されたこと、また福島第一原子力発電所の事故収束のための拠点として使用されたことから営業再開への道のりは遠かったものの、全スタッフが熱い想いで復旧に向けて尽力した思い出が語られました。

「東日本大震災・原子力災害伝承館」では、さまざまな映像や資料写真を見ながら、最大震度 6 強（福島県内）の大きな地震や押し寄せる津波、さらに福島第一原子力発電所の事故という未曽有の「複合災害」によって多くの人々が命を失い、また故郷から離れることを余儀なくされたと説明を受けました。展示されている資料の中には、被災した人々が苦しい避難生活の中で残したメモなど貴重なものも多く、「辛かった生活が思い浮かぶ」「完全な復興にはまだまだ時間がかかりそうだけど、心から応援したい」という声が聞かれました。

浪江町にある震災遺構「町立請戸小学校」は、津波によって大きな被害を受けながらも、震災当日学校にいた児童や先生が犠牲になることはなく、全員が無事に避難できた「奇跡の学校」として語り継がれる施設です。津波に追われる中、子どもたちが駆け上がるように避難したという丘に立った受賞者たちは、「この坂を上って逃げてきたんですね…」と目を細めながらつぶやき、辛うじて校舎の形状を保ちながらも津波による巨大な力で崩れた外壁や曲がった水道、卒業式のために準備されていた看板を悲しそうな表情で見つめていました。

2　日目の夜は、相馬町の松川浦で「浜焼き」を体験。地元で獲れたカレイをはじめ、新鮮な魚介や野菜を炭火で焼く「浜焼き」は、松川浦の旅館で伝統的に行われていた調理スタイルですが、震災をきっかけにその賑やかな姿が見られなくなっていました。地元旅館の若旦那衆で結成される「松川浦ガイドの会」によって再び火が入った「浜焼き」の魅力に触れた受賞者たちは、一本一本手作りされた竹串をカレイに刺し、ふんわりと焼き上がった身をほぐしながら「福島のバーベキューを味わえて楽しい」「いい思い出になった」と笑顔を見せていました。